

令和 4 年 4 月 21 日現在

機関番号：14201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K01026

研究課題名（和文）古代北アフリカにおけるヘレニズム王権の生成と終焉

研究課題名（英文）Hellenistic Kingdoms in the Ancient North Africa

研究代表者

大清水 裕（OSHIMIZU, YUTAKA）

滋賀大学・教育学部・教授

研究者番号：70631571

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：ローマ帝国の北アフリカ支配の進展については、ローマとカルタゴの対立を中心に語られてきた。しかし、カルタゴはフェニキア人の植民によって成立したものであり、先住民たるヌミディア人やマウレタニア人の王国は捨象されがちであった。時に言及される場合でも、ローマの同盟国、あるいは従属国と位置付けられるにとどまることが多かった。本科研では、これら先住民諸王国とヘレニズム世界の関係に注目し、そのヘレニズム王権としての新しい側面を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代ローマの歴史は、都市国家として始まったローマが次第にその支配を広げ、帝国化していくものとして語られてきた。しかし、ローマ帝国の支配下に置かれた地域は、それぞれ独自の歴史をもち、様々な展開を見せていたと考えられる。本研究は、ローマ帝国支配下の各地域が、一方的に、一様に「ローマ化」されたわけではなく、それぞれの地域の来歴に基づいて多様な社会を生みだしていたことを示すものと位置付けられる。

研究成果の概要（英文）：In narrating the expansion of Roman rule in the ancient North Africa, many scholars have paid much attention to the relationship between Rome and Carthage, a Phoenician colony. The African natives, Numidians or Mauretanians, have been regarded as only Roman allies or client states. The research programme paid more attention to the relationship between the native kingdoms and the Hellenistic world, and showed some new Hellenistic aspects of them.

研究分野：古代ローマ史

キーワード：ローマ帝国 ヌミディア マウレタニア 北アフリカ ヘレニズム

1. 研究開始当初の背景

古代地中海世界、中でも北アフリカに関する歴史叙述は、フェニキア人によって建設された都市国家カルタゴと、それに挑む古代ローマとの対立を主軸として語られてきた。古代ローマは、前3世紀半ば以来、三度にわたるポエニ戦争を経て、前146年にカルタゴを滅ぼす一方、並行してギリシア世界にも進出し、前2世紀半ばまでには地中海世界の覇権を握った、というストーリーである。イタリア半島を支配下に収めた陸上勢力ローマと、北アフリカを拠点とする海上勢力カルタゴ、という対立の構図は分かりやすい。しかしながら、この歴史叙述には、カルタゴ建設よりも前から北アフリカに暮らしていた先住民の存在が欠けていることを指摘せねばならない。

そもそもカルタゴは、現在のレバノンを故地とするフェニキア人によって建設された都市であった。ローマ人と同様、カルタゴのフェニキア人もまた、北アフリカに外からやって来た人々だったのである。他方、北アフリカには、フェニキア人の到来よりも前から、フェニキア人の話すポエニ語とは異なる、リビア語と呼ばれる言語を用いる先住民が暮らしていた。彼らは、フェニキア人のもたらした都市文化の影響を受けて独自の文化を生み出し、北アフリカの内陸部に王国を形成していく。彼らの王国ヌミディアは、ローマと結んだマシニッサ王(前238-前148年)の下で統一され、カルタゴがポエニ戦争で衰えていくのを横目に、次第に勢力を拡大していった。共和政ローマによる北アフリカ支配は滅亡直前のカルタゴが支配していたわずかな領域にとどまり、北アフリカの大半はヌミディア王国の支配下にあったのである。

このヌミディア王国は、共和政末期の内戦で元老院派に味方した結果、カエサルによって滅ぼされた。しかし、最後のヌミディア王ユバ1世の子ユバ2世は、カエサル家で養育され、その後アウグストゥス(在位:前27-後14年)によって再び北アフリカに送り込まれた。現在のアルジェリア東部からモロッコ北部にかけての地域に創設されたマウレタニア王国の王とされたのである。このマウレタニア王国は、その子プトレマイオス2世がカリグラ帝(在位:37-41年)によって殺害されたために滅亡し、クラウディウス帝(在位:41-54年)の下で、北アフリカ全体がローマの直接支配下に置かれることになる。

このように、北アフリカのローマ支配は、ポエニ戦争の勝利によって完成したわけではなく、ヌミディア王国やマウレタニア王国といった先住民の王国との角逐を経て完成されたものだった。しかしながら、古代ローマ史という研究の枠組みにおいては、両王国ともローマの同盟者、あるいは従属国として理解されるにとどまってきた。とりわけ、アウグストゥスによって創設されたマウレタニア王国は、「ローマ化」の遅れた地域の間接支配の手段と位置付けられることが多く、両王国の持つ独自の性格が検討されることはなかったのである。

近年では、両王国のヘレニズム王権としての性格が、建築史や美術史、貨幣研究の立場から指摘されるようになってきているが、歴史学の立場では、依然としてリウィウスやポリュビオスといった文献史料に基づき、両王国をローマの従属国とみなす立場が主流である。しかしながら、エーゲ海のデロス島やロドス島、アテナイでも、ヌミディア王やマウレタニア王の名を刻んだ碑文が発見されている。これらの碑文が示すように、ヌミディア王やマウレタニア王は、北アフリカの内部でのみ活動していたわけでも、ローマとの関係しか持たなかったわけでもない。両王国の動向を、同時代のヘレニズム世界との関連で理解していく必要があるのではないだろうか。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで、古代ローマの従属国と位置付けられてきたヌミディア王国やマウレタニア王国といった北アフリカの諸王国を同時代のヘレニズム世界の中に位置づけ直し、それら独自の行動原理を明らかにすることにある。

3. 研究の方法

本研究の独自性は、上記の目的を達成するために、これまで典拠とされてきたリウィウスやポリュビオスといった文献史料を活用するだけでなく、東方で発見された碑文史料を重視する点にある。北アフリカは、帝政期にはラテン語が広く用いられた地域であり、ヘレニズム世界とは縁遠い地域とみなされがちである。その結果、北アフリカを対象とする研究においては、東方出土の碑文は等閑視されてきた。他方、ヘレニズム世界を対象とする研究においては、北アフリカは地理的に遠すぎ、そもそも関心が向けられることが少ない。本研究においては、北アフリカの諸王国をヘレニズム世界の中に位置づける。ヘレニズム世界は西方に広く拡張されると同時に、時間的にも、クレオパトラの死とプトレマイオス朝の滅亡までではなく、クレオパトラの孫にあたるプトレマイオス2世の死とマウレタニア王国の滅亡まで延長されることになるだろう。北

アフリカ諸王国のヘレニズム王権としての性格を明らかにすることを通して、ローマ支配の進展とそれへの適応という単線的な歴史理解にとどまらない、多面的な古代地中海世界のあり方を示すことができるであろう。

4. 研究成果

ヌミディア王マシニッサは、第2次ポエニ戦争においてローマの同盟者として登場し、初めてヌミディア人の政治的統一を成し遂げた。彼は、第2次ポエニ戦争終結後、たびたびカルタゴとの間で支配地域をめぐる対立を引き起こし、最終的にカルタゴを滅亡させることになる第3次ポエニ戦争の口実を生み出した。そのため、このマシニッサ王の行動が、ローマの従属的同盟者として、その意をくんだものであったとみなされることも多かった。しかし、エーゲ海のデロス島で発見された碑文に見られるマシニッサ王の姿は、ポリュピオスやリウィウス、あるいはキケロといった文献史料に見られるローマの従属的同盟者というイメージとは異なるように思われる。その碑文においては、マシニッサ王は、デロス島のアポロン神域への小麦の提供者として現れる。先行研究では、余剰小麦の輸出といった商業的目的、あるいは東方に展開するローマ軍への食糧供給といった親ローマ的な政治的上の目的が重視されてきた。しかし、この時期の地中海世界で小麦の大規模かつ長距離の交易がおこなわれていたとは考えにくいというに、史料を精査すると、この神域への小麦の供給時、東方にローマ軍が展開していたわけではないことが分かる。デロス島は有名な神域として外交上中立的な立場にあり、親ローマ的な姿勢を示すのに相応しい場でもなかった。デロス島の会計碑文上では、マシニッサ王は他のヘレニズム君主たちと同様に列挙されており、ここからは、ヘレニズム君主として認識されることを目指したマシニッサ王の姿勢を読み取るべきだと考えられる。

最後のヌミディア王ユバ1世は、ローマ共和政末期にカエサル派とポンペイウス派の間で生じた内戦に、ポンペイウス派について参戦し、敗北した。この出来事についても、ヌミディア王国のローマへの従属性を示すものと理解されてきたが、同時代史料を精査すると、そもそもヌミディア王の参戦は、内戦時の両陣営において想定されていなかったことがうかがえる。その参戦は、ローマの有力者にとって予想外の、意外なものだったのであり、ヘレニズム諸王国にならった軍部隊を持つユバ1世の参戦は、警戒心を持って扱われた。ポンペイウスがカエサルに敗北した後は、カエサルに抵抗を続ける元老院派の面々を押さえて、ユバ1世は、事実上、北アフリカの支配者として振舞っていたとされる。ヌミディア王国が、ローマの従属的同盟者の地位に安穩としていたわけではないことが理解されよう。

ヌミディア王国滅亡後、ユバ1世の遺児、同2世はローマのカエサル家で養育された。そして、前25年、現在のモロッコからアルジェリア西部にかけての地域に創設されたマウレタニアの王として、アウグストゥスによって派遣される。ユバ2世は王としてよりも、ギリシア語で多くの作品を残した文人として知られた。また、その妻クレオパトラ・セレネは、プトレマイオス朝エジプト最後の王クレオパトラの娘であった。マウレタニア王国の宮廷は、ヘレニズム文化の強い影響の下で営まれていたのである。彼らの間に生まれた王子はプトレマイオスと名付けられ、マウレタニア王として即位したが、後40年、時のローマ皇帝カリグラに召喚され、突如処刑された。その理由は定かではなく、先行研究でもさまざまな見解が提示されてきた。本研究では、マウレタニア宮廷のヘレニズム的性格に着目し、その死が、ヘレニズム国家の王としての振る舞いが、「王」に憧れながらもそうなるわけにはいかなかったローマ「皇帝」カリグラの嫉視を招いた結果だったのではないかと論じた。

以上のように、ヌミディア王国とマウレタニア王国という北アフリカの先住民諸王国は、ヘレニズム世界と独自のつながりを持ち、単に古代ローマの従属的同盟者にとどまらず、独自の行動をとっていたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大清水裕	4. 巻 70
2. 論文標題 「共和政末期ローマの内戦とヌメディア王国：ユバ1世の挑戦と挫折」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『滋賀大学教育学部紀要』	6. 最初と最後の頁 71-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大清水裕	4. 巻 54(2)
2. 論文標題 「ローマ帝政期北アフリカにおける軍隊と社会：ハドリアヌス帝の演説を中心に」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『軍事史学』	6. 最初と最後の頁 79-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大清水裕	4. 巻 68
2. 論文標題 「書評 丸亀裕司『公職選挙にみるローマ帝政の成立』」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『イタリア学会誌』	6. 最初と最後の頁 169-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大清水裕	4. 巻 44
2. 論文標題 「マウレタニア王プトレマイオスの死とローマ皇帝カリグラ：北アフリカにおけるローマ支配の進展とマウレタニア王国の属州化」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『地中海学研究』	6. 最初と最後の頁 5-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大清水裕	4. 巻 271
2. 論文標題 「デロス島出土碑文におけるヌミディア王マシニッサ：ヘレニズム世界から見た前2世紀の北アフリカ」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『西洋史学』	6. 最初と最後の頁 22-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大清水裕
2. 発表標題 「ローマ帝国におけるキリスト教徒迫害の諸相 ネット治世とディオクレティアヌス治世を中心に」
3. 学会等名 シンポジウム「帝国とキリスト教」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大清水裕
2. 発表標題 「ローマ帝政期北アフリカの水道建設に見るコミュニケーションとメディア」
3. 学会等名 第7回 前近代におけるメディアとコミュニケーション研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 ジェラルド・クーロン、ジャン＝クロード・ゴルヴァン（著）、大清水 裕（訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 マル社	5. 総ページ数 160
3. 書名 古代ローマ軍の土木技術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------